

「男、突っ走る！」

第64回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (22)

『オフィスツリーイン』代表

福沢 瑞枝 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

加藤 直也 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

山口 拓海 (22)

元名古屋芸術専門学校学生

本部 明美 (21)

元名古屋カフェ調理専門学校学生

山岡 智行 (32)

映画プロデューサー

國村 英作 (51)

まちづくり会社社長

伊藤 理沙 (32)

若手起業家

大島 幸次 (51)

広告制作会社社長

橋崎 悟 (47)

WEB会社社長

1 木内家・全景（夜）

2 同・雅也の部屋

パソコンで原稿を書いている雅也——手を止めると、うめき声をあげて背中を伸ばすと、PC眼鏡をはずし、大きな溜息をつく。

と、スマホに着信が来る——雅也、スマホを手にすると画面を見る。直也からの電話である。

雅也「（電話に出て）もしもし加藤、どうしたの。仕事帰り？」

3 神奈川・鶴見駅前（夜）

直也が電話をしながら歩いている。

直也「そう。だから電話したの。アパートまでの二十分、暇だから。そっちは、仕事してた？」

雅也の声「ゴリゴリ仕事してました。まあ、ちよつと休憩しようと思ってた頃だから良

かったんだけど」

直也「社長、お仕事お疲れ様です。相変わらず忙しいんですか？ やっぱりエンターテインナー木内さんは、いろいろやってるんですか？」

4 木内家・雅也の部屋（夜）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「その言い方やめなさい。忙しいって言ったって、それぐらい仕事取ってこないと食べていけないんだから」

直也の声「まあ、それはそうか」

雅也「エンターテイナー木内さんから、嬉しい報告してあげようか？」

直也の声「何？」

雅也「今月中旬、まあといっても二十日前後にはなると思うんだけど、仕事で千葉に行くんだよ。だから、その時にでも会わない？」

5 街（夜）

直也が電話をしながら歩いている。

直也「マジか、じゃあこっち来るのか？」

雅也の声「そう。せっかくだし、加藤とも会いたいと思っただろ」

直也「じゃあ、東京に来たメンツ集めようか、それと千葉にいるぐっちも」

雅也の声「良いね」

直也「東京組には、俺から声かけとくよ」

雅也の声「ありがとう」

直也「仕事って、撮影か何か？」

6 木内家・雅也の部屋（夜）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「うん。脚本担当した映画が、先月クラインクインしてね。大きな脚本修正もなく、プロデューサーからも何とか撮影は進んでいるという報告をもらったんだけどさ、せっかくだったら直接現場に行っただろ、スタッフやキャストの方にご挨拶したいと思って

ね」

直也の声「さすが木内先生、ご活躍ぶりが」

雅也「だから、やめなつてその言い方」

直也の声「楽しみにしてるわ、こっちに来るの。また日付分かったら連絡して。店の予約とかもあるし」

雅也「お、まさか加藤が幹事やってくれるの？」

直也の声「木内先生をもてなす会だろ。さすがに今回ばかりは、本人に幹事やらせるわけにはいかないから」

雅也「ありがとう。じゃあ今回はお言葉に甘えて、加藤にお願いするわ。飲み会とか遊ぼうって時、いつも言い出しっぺは加藤なのに俺が幹事ばかりやらされてたんだから」

直也の声「そうだったけ？」

雅也「卒業式の一週間前に、みんなで集まったやつあったでしょ。あれだって、最初にやりたいって言い出したのは加藤なのに、

会社の早期就職と研修で東京にいて準備が
できないなんて言うから、俺がゆきちゃん
と一緒に引き受けたんだから」

直也の声「その節はお世話になりました。ち
なみに、何か食べたいものとかある？」

雅也「美味しいお肉が食べたいです！」

7 高速道路を走る観光バス（夜・数日後）

N「それからしばらく経った七月の二十日。
僕は夜行バスに乗り、東京へと向かった」

8 バスタ新宿・表（明け方）

スーツケースを持った雅也が出てくる。
N「完成してまた月日が経っていないバスタ
新宿には、他にも何台もの観光バスが到着
していた」

9 松戸駅・改札口（朝）

スーツケースを持った雅也が歩いてい
る。

N 「映画の撮影が行われている千葉県松戸市は、新宿駅からJRを乗り継いでも三十分ほどで到着した」

10 松戸・高架下の空き地

監督などのスタッフが準備をしており、カメラの前でスタンバイをしているキヤストたち——その中に山岡の姿もある。

監督 「はい、本番。よいい、スタートッ」

と、助監督がカチンコを鳴らし、カメラマンがカメラを回していく——キヤストたちが殴り合いなどの喧嘩のシーンを撮り始める。

少し遠くの道を、雅也が通りかかる。

雅也 「あ…：あそこだ」

と、現場のほうへ向かっていく——カメラから少し離れたところで、飲み物の準備をしているスタッフがいる。

雅也、そのスタッフの元へ行くと、

雅也「（小声で）あの、すみません」

スタッフ「あ、今撮影中なんです。本当に喧嘩してるわけじゃないですから」

雅也「分かってます。僕、この映画の脚本を担当した木内と申します」

スタッフ「失礼しました」

監督の声「カットッ。一旦休憩」

と、そろそろとスタッフやキャストたち
ちが戻ってくる。

雅也「（山岡を見て）山岡さん」

山岡「木内さん、ようこそいらっしやいました」

雅也「ご無沙汰してます」

山岡「（一同に）皆さん紹介します。今作の脚本を担当された、木内雅也さんです」

拍手をする一同。

雅也「木内です。皆さん炎天下の中、ご苦労様です。（と菓子折りを見せて）地元のお菓子持ってきました。皆さんで召し上がってください」

一同「ありがとうございます」

と、それぞれ休憩をしていく。

山岡「遠いところ、ありがとうございます」。

疲れたんじゃないかもしれませんか？」

雅也「いえいえ。僕、どこでも眠れるタイプなので、名古屋発の夜行バスに乗って目をつぶって次に目を開けたら、もう新宿駅着いちやってました。（と笑うと）そういえば、山岡さんも出るんですか？ 確か、クランクインの前にいただいたキャスト表には、名前書いてなかったですけど」

山岡「それが恥ずかしい話、途中まで演じていたある役者が飛んじやいましてね」

雅也「え……？」

山岡「それで、僕が急遽代役をやることになっ
って」

雅也「飛んだって……その人の事務所に連絡
はしたんですか？」

山岡「フリーでやってる人だったんですよ。
だから、責任の所在を問おうと思ってもで

きなくて」

雅也「大変でしたね……。 (と台本をカバンから取り出すと) 何の役ですか、山岡さんが代理の役って」

山岡「(台本を指さして) この役です」

雅也「結構出番のある役じゃないですか。これを途中で投げ出すなんて、一体何考えてるんですかね。しかも途中でってなると、まさか撮り直しとか？」

山岡「一応、その予定です」

雅也「そうですか」

山岡「木内さん、今日はこちらに？」

雅也「ええ、明日は東京で友達と会う約束してるんです。カラオケか漫喫にでも止まる予定です」

山岡「今日はクライマックスの撮影なんです。これが終わったら、主要キャストとスタッフで簡単に飲みませんか？ といっても、打ち上げでもないので、コンビニで軽くお酒買う程度になると思いますけど」

雅也「せっかく来たんです、ぜひ参加させて
いただきます」

11 松戸・コンビニの前（夜）

雅也、山岡、監督、キャストの数人が、
缶チューハイで乾杯をする。

一同「かんぱーい」

一同、それぞれ飲み始めて、

山岡「木内さん、今日はありがとうございますま
した」

雅也「いいえ。今日、皆さんにお会いできて
良かったです」

監督「でも驚きましたよ。脚本を書いているの
が、こんなにも大人しそうな人だったなん
て」

雅也「僕も、ヤンキー映画の脚本なんて書い
たことなかったですからね。参考に、いろ
んなヤンキー映画を見て、勉強しました」
キャストA「確かに、まったくヤンキー要素
ないですもんね、木内さんは」

雅也「そりゃ、まったく無縁の生活送ってますから」

キャストB「でも、登場人物一人ひとりが魅力的で、こちらにも演じ甲斐があります」

雅也「そう仰っていただけると、脚本を書いて良かったなって思います。今回の作品のキャラクターは、とにかく掘り下げて作って、山岡さんとも何度も電話で相談して。

あれは良い時間でした」

山岡「こちらこそ、素敵な脚本をありがとうございます」

雅也「無事にクランクアップ迎えられるように、お祈りしています」

雅也と山岡、握手を交わす。

12 漫画喫茶・一室

勢いよく横たわる雅也。

N「山岡さんをはじめ、キャストやスタッフの皆さんと別れを告げた僕は、東京まで戻り、漫画喫茶で朝を迎えた。その日の日中

は、スーツケースをコインロッカーに預け、
身軽な状態で東京観光をゆつくり行った。
そして、その晩、加藤たちと久しぶりに会
うことになった」

13 東京・焼肉屋

雅也、直也、拓海が焼肉を食べている。

拓海「まさかここでうちーに会えるなんて
思わなかったよ」

雅也「ごめんね、急で」

直也「ちょうど、東京組で集まろうって話し
てたんだよ。だから、木内がこっちに来た
のがちょうど良いタイミングだったよ」

拓海「さすがにこっちに来た人全員揃うのは
無理だけどな。現になつ姐さんは、納期近
いCG制作があって今日は来られないって
言うし」

直也「福本遅いな」

拓海「あれ、同じ職場だろ」

直也「そうだけど、抱えてる案件はお互いに

違うから」

拓海「そっか」

と、瑞枝が入ってくる。

瑞枝「ごめん、遅くなっちゃった」

拓海「おお、待ってたよ」

直也「待ちかねた」

雅也「久しぶり、みずちゃん」

瑞枝「みんな元気そうだね。まあ、加藤とは

毎日顔合わせてるけど」

雅也「何飲む？」

瑞枝「ビールッ！」

×

×

×

雅也「こっちの暮らしは、みんな慣れた？」

瑞枝「まあね」

拓海「俺も何とか」

直也「東京はな、物価が高い。厳しいよ、一

人で生活するだけでも」

雅也「そっか。まあ、こっちもね経費を何とか

抑えようと、交通手段を夜行バスにした

りして、何とか切り詰めてる」

拓海「原稿料がっぽり稼いでるんじゃない

の？」

雅也「まさか。(と苦笑して)まだまだだつて」

瑞枝「私、まだ焼肉奢ってもらってない」

雅也「そのうちね」

直也「じゃあ今日は、木内社長の奢りで」

拓海「お、ゴチになります」

瑞枝「ごちそうさまです」

雅也「ちよつと待った、ちよつと待った！」

N「みずちゃん、ぐつち、そして加藤と、一緒に専門学校生活を楽しんだ仲間との久しぶりの再会でした。まだ卒業から四ヶ月しか経っていないのに、すぐく久しぶりに会ったような気がしていました。翌日は、一日ファミレスにこもり、ひたすら原稿を書いたり、事務作業をした後、明美ちゃんと食事をするようになりました」

雅也が待っている——明美が走ってやってくる。

明美「せんぱーい！」

雅也「おつかれ、明美ちゃん」

明美「お久しぶりです」

雅也「何言ってるの、先月一緒に学園祭行っ
たじゃん」

明美「でも、あの一回だけだったじゃないですか。前みたいにも会えるわけじゃないんですから、先輩とは」

雅也「まあ、それもそうか」

明美「行きますか、そろそろ」

雅也「うん、行こう」

15 同・居酒屋（夜）

雅也と明美が飲んでいる。

明美「嬉しかったですよ、先輩から東京に行くって連絡もらったときは。思わず飛び跳ねちゃいました」

雅也「そんなに？」

明美「だって、先輩に会えるんですよ」

雅也「俺に会うことがそんなに嬉しいの？」

明美「はいッ」

雅也「まあ確かに、学生時代は会おうと思えばいつでも会えた人と、滅多に会えなくなるのは辛いもんね。正直、俺も先月会ったばかりだけど、今日明美ちゃんに会えるのが楽しみだった」

明美「先輩」

雅也「これからも頑張ってるね。寂しくなったらいつでも電話するんだよ。俺で良ければいつでも話聞くから」

明美「先輩こそ、一人で仕事するとなると大変だと思えますけど、頑張ってくださいね」

雅也「お互い、まだまだこれからだもんね」

明美「今日帰っちゃうんですか？」

雅也「うん。今日の夜の夜行で、愛知に帰る」

明美「寂しくなりますね」

雅也「また会えるって。寂しくなったら、俺から手紙書くかもしれないけど」

明美「作家先生の手紙ほどありがたいものはないですわ」

雅也「だから、みんなして持ち上げないの」

明美「昨日、芸術専門学校同期生たちと会ったんですよ」

雅也「会ったよ。からかわれたんだから」

明美「どういうことですか？」

雅也「芸術専門学校の同期たちは、一方的に明美ちゃんのこと知ってるんだから」

明美「どうして？」

雅也「去年、一緒に鶴舞公園にお花見行ったでしょ。あの時のSNSの投稿が、うちらの中でプチ炎上したの。うちーが女と一緒ににお花見行ったなんて言う子もいてね。だから、カフェ調理専門学校の後輩だって簡単な説明したんだよ。だから、一方的に知られてる」

明美「私、何か投稿しましたっけ？」

雅也「『大好きなうちー先輩とお花見した』って投稿したんだよ」

明美「ああ、あれですか。だって、本当にう
っちー先輩が大好きなんですもん」

雅也「それを変に捉えちゃうのが、うちの周
囲の人たちなの。火消しするの大変だった
から」

明美「じゃあ、今日も炎上させますか？」

雅也「頼むから、やめてくれ」

笑いあう雅也と明美。

N「その日の深夜、僕は明美ちゃんと品川駅
で別れた後新宿駅に戻り、バスタ新宿を出
発する高速バスに乗り、翌日の明け方、名
古屋駅に戻りました。そしてその足で、そ
のまま國村さんの事務所を訪れて、編集会
議に参加することになったのです」

16 『スタイル・タウン』・事務所

雅也、國村、伊藤、大島、橋崎が編集
会議をしている。

雅也「え、来月初めの夏祭りに発行ですか？」
伊藤「はい。なので、座談会は予定通り明後

日行うとして、そこから制作や印刷までのスケジュールを考えると、ほとんど日がありません」

大島「座談会やって二、三日の間で原稿仕上げてもらわないといけないけど、木内君、大丈夫か？」

雅也「はい。ちょうど大島さんところの原稿も無事に提出できて、タスク的には空いてるので」

大島「ありがとう。あの原稿、おかげで助かったよ」

橋崎「木内君に座談会ページをお願いするとして、他のページは僕たちで分担したほうが良いかもしれないですね」

大島「そうだな。お店紹介は、俺が書くよ。このあたりのお店のことは知り尽くしてるし、写真素材とかもうちの会社にあるから」

國村「お願いします。僕と理沙ちゃんは、前書きと編集後記、それからインフォメーションの原稿を書こう」

伊藤「それで良いと思います」

大島「表紙の撮影はもう終わって、信金が今回スポンサーに入ってくれてるから、表四の広告はそれで良いとして、表二と表三はうちの会社の宣伝や告知イベント枠として使うか。編集部の特権だ」

國村「そうしましょう」

伊藤「完成が見えてきましたね」

大島「もうひと踏ん張りだな」

雅也「頑張りましょう、もう一息」

N「二日後、巻頭特集の座談会が行われ、僕はギリギリのスケジュールの中で、執筆作業に追われることになったのでした」

つづく